

2025年1月15日

## 中国人民解放军による対台湾演習の実態と意図 (中国・台湾研究会コメンタリーNo. 3)

拓殖大学 海外事情研究所 教授  
門間理良

### はじめに

2022年8月のナンシー・ペロシ米下院議長（当時）の訪台以降、中国人民解放军（以下、解放軍）はしばしば、台湾本島周辺海空域を対象とした軍事演習を実施している。本稿では、それらの演習の特徴を抽出し分析するとともに、その演習に込められた意図を探ることに主眼を置いて執筆する。

取り上げる演習は、2022年8月実施の「重要軍事演習」、2023年4月の「聯合利剣」演習、2024年5月の「聯合利剣-2024A」演習、同年10月の「聯合利剣-2024B」演習に加えて、同年12月に解放軍が7つの「空域保留区」を設定するとともに、海軍艦艇と海警局公船を展開させた動きについて、分析を加えるものとする。

### 1. 「重要軍事演習」（2022年8月）の特徴と意図

1997年4月2日にニュート・ギングリッチが米国下院議長として訪台してから、25年ぶりとなる2022年8月に同職にあったペロシが訪台した。そのことを中国側が口実にして、8月4日から9日まで実施したのが、本軍事演習である。

本演習の最大の特徴は、台湾本島に対する直接的な侵攻を念頭に置いて策定されたと思われるシナリオに基づいて実施された点にある。4日から5日にかけて、台湾総統府や外交部、国防部のウェブサイトに対して、複数のコンピューターまたはデバイスから同時に大量のアクセスを行うDDoS攻撃が行われた。このため、これらのウェブサイトは一時閲覧不能の状況に陥った。また、街中のコンビニエンスストアなどで電光掲示板がハッキングされて、ペロシ氏訪台を非難する掲示が表示されたところもあった。

さらに今回は、演習初日の8月4日にミサイル発射演習が実施された。これはサイバー攻撃とともに、台湾本島に対する第一撃を念頭に置いたものと言える。様々な発射パターンを試しているのも特徴的である。着弾海域は台湾北部の台北港、基隆港沖合や、台湾南西部の高雄港沖合、台湾本島東部海域だった。仮に解放軍がこれら3港を封鎖してしまえば、台湾の貨物総量の約80%以上を遮断することが可能とみられている。台湾東部の海域を狙ったミサイルには、米海軍機動部隊の動きを牽制する意図が込められていたものと思われる。また、台湾海峡に向けても解放軍東部戦区所属の陸軍部隊が長距離多連装ロケットの実弾射撃訓練を実施した。

軍用機や海軍艦艇の動きも活発で、7日には台湾海峡周辺で軍用機66機、艦艇14隻が確認されている。金門島周辺でも無人機の飛行が確認されている。

筆者はこのような演習の規模から判断して、今回の事態を「第4次台湾海峡危機」と呼ぶことを提唱している。

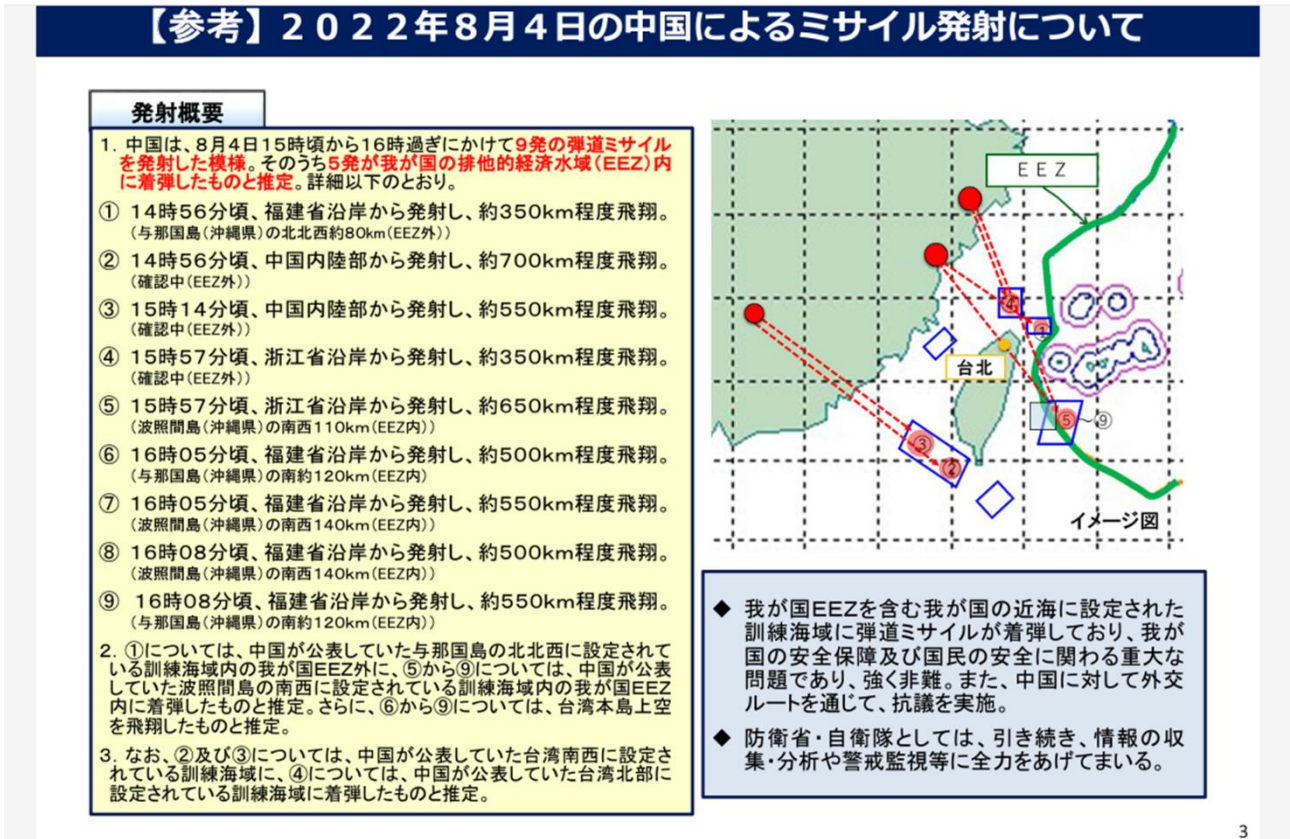
図1 重要軍事演習



出所：China Power Team. "Tracking the Fourth Taiwan Strait Crisis" China Power. August 5, 2022. Updated November 8, 2023. Accessed January 10, 2025.

<https://chinapower.csis.org/tracking-the-fourth-taiwan-strait-crisis/>

図2 重要軍事演習時のミサイル発射演習



出所：防衛省ウェブサイト（2022年8月4日）

## 2. 「聯合利剣」演習（2023年4月）の特徴と意図

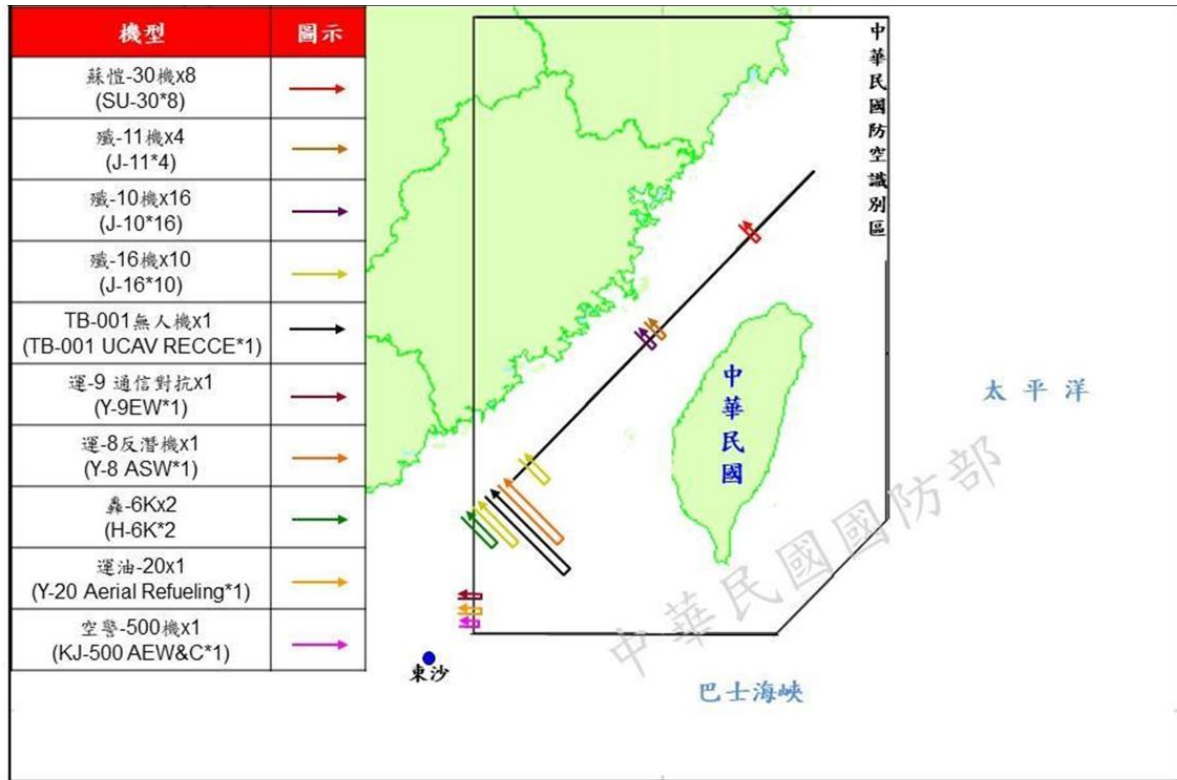
この演習の口実となったのは、同年4月5日、米国カリフォルニア州ロナルド・レーガン図書館で行われた蔡英文総統とマッカーシー米下院議長の会談である。これを受けた形で演習は4月8日から10日までの3日間実施された。

軍用機の活動はこの3日間で合計232回確認された。4月10日には各種軍用機が台湾周辺で91回活動し、このうち台湾防空識別圏の南西空域・東南空域、海峡中間線を越えた飛行は54回に及んだ。これは1日あたりの記録としては過去最高だった。艦艇の活動は空母「山東」、ルーヤンIII級ミサイル駆逐艦、ジャンカイII級フリゲート、フユ級高速戦闘支援艦が西太平洋に進出した。「山東」は宮古島南方の海上で艦載機の発着艦訓練を実施した。

一見すると今回の演習も派手だが、前回と異なりミサイル発射演習のための進入禁止区域を設けることはしなかった。しかし、元手がかからないフェイクニュース（例：「中国海軍の艦艇が台湾の24海里に接近している」）の類は大量に発出されている。

総じて言えば、今回の軍事演習が台湾民衆の生活に影響を与えるほどの激烈さを伴っていない。蔡英文総統の外遊時と同時期に行われた馬英九元総統の訪中を歓迎した姿勢、さらに翌年1月に総統選挙と立法委員選挙が実施される台湾の状況を考えると、中国の攻撃対象はあくまでも民進党政権であって、台湾民衆ではないとの習近平政権のメッセージが窺えるのである。

図3 中国軍用機の活動状況（2023年4月8日0600-9日0600）

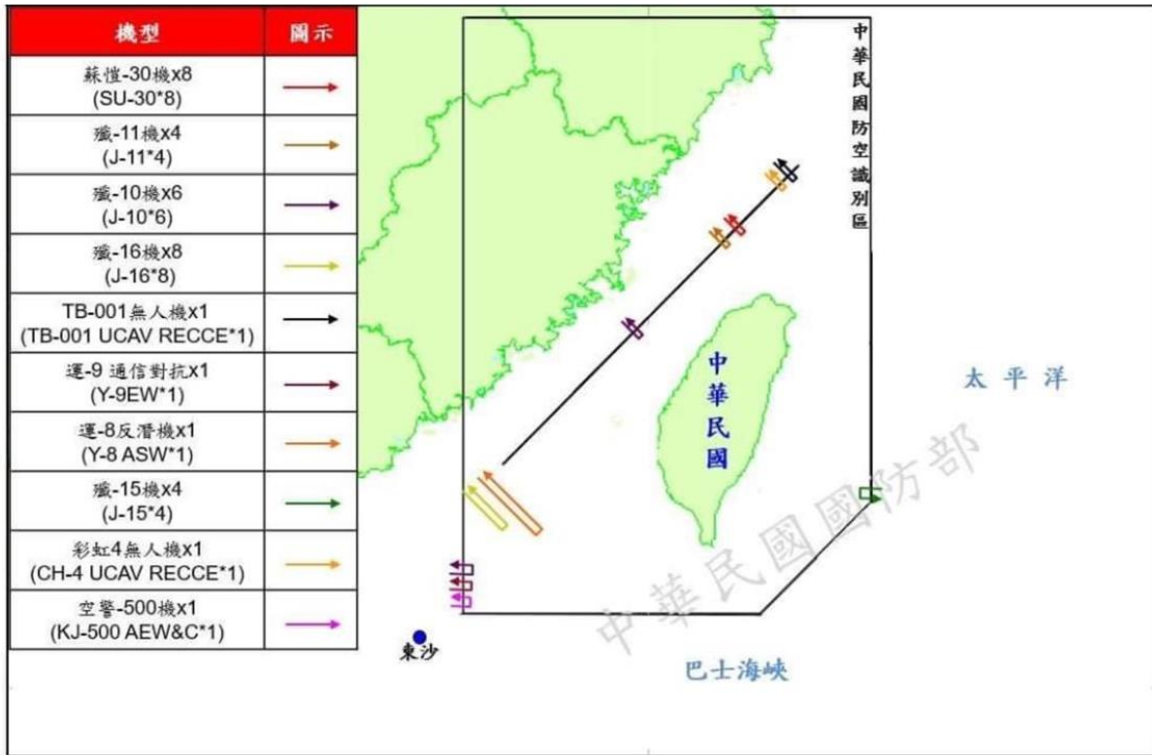


出所：台湾国防部空軍司令部プレスリリース（2023年4月9日）

[https://www.mnd.gov.tw/Publish.aspx?u=NewUpload/202304/2\\_1120409\\_%e8%87%ba%e6%b5%b7%e5%91%a8%e9%82%8a%e6%b5%b7%e3%80%81%e7%a9%ba%e5%9f%9f%e5%8b%95%e6%85%8b%e5%9c%96\\_025613\\_.jpg&fid=44146](https://www.mnd.gov.tw/Publish.aspx?u=NewUpload/202304/2_1120409_%e8%87%ba%e6%b5%b7%e5%91%a8%e9%82%8a%e6%b5%b7%e3%80%81%e7%a9%ba%e5%9f%9f%e5%8b%95%e6%85%8b%e5%9c%96_025613_.jpg&fid=44146)



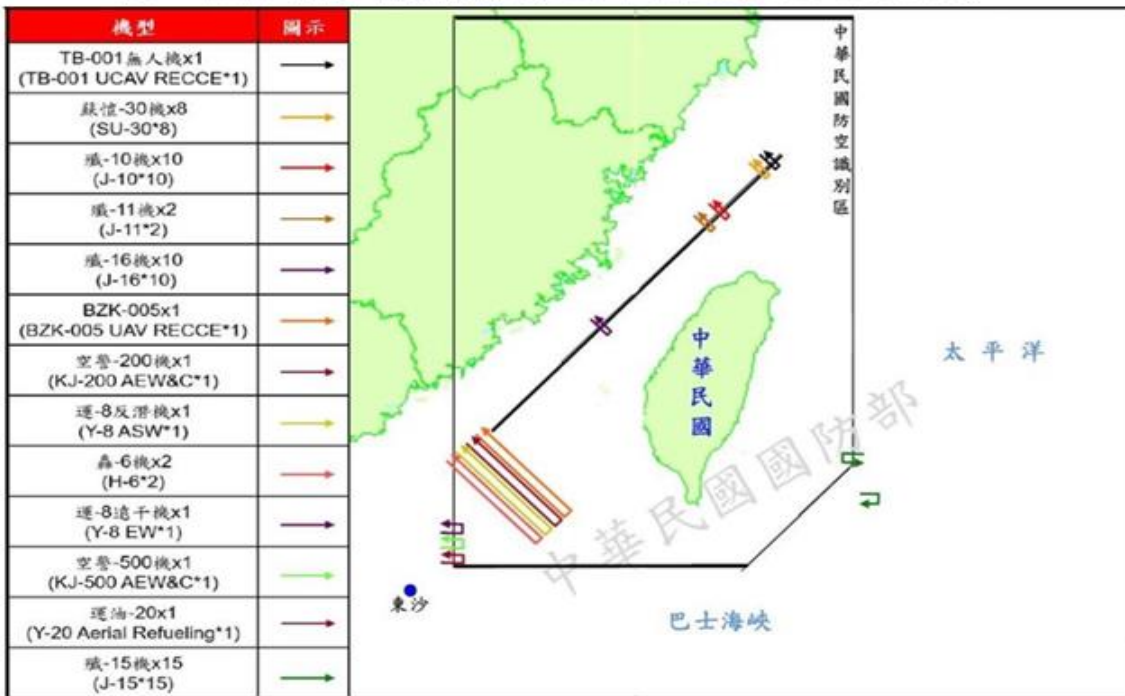
図4 中国軍用機の活動状況（2023年4月9日0600-10日0600）



出所：台湾国防部空軍司令部プレスリリース（2023年4月10日）

[https://www.mnd.gov.tw/Publish.aspx?u=NewUpload/202304/1120410\\_%e8%87%ba%e6%b5%b7%e5%91%a8%e9%82%8a%e6%b5%b7%e3%80%81%e7%a9%ba%e5%9f%9f%e5%8b%95%e6%85%8b%e5%9c%96\\_301948.jpg&fid=44157](https://www.mnd.gov.tw/Publish.aspx?u=NewUpload/202304/1120410_%e8%87%ba%e6%b5%b7%e5%91%a8%e9%82%8a%e6%b5%b7%e3%80%81%e7%a9%ba%e5%9f%9f%e5%8b%95%e6%85%8b%e5%9c%96_301948.jpg&fid=44157)

図5 中国軍用機の活動状況（2023年4月10日0600-11日0600）



出所：台湾国防部空軍司令部プレスリリース（2023年4月11日）

[https://www.mnd.gov.tw/Publish.aspx?u=NewUpload/202304/3\\_1120411\\_%e8%87%ba%e6%b5%b7%e5%91%a8%e9%82%8a%e6%b5%b7%e3%80%81%e7%a9%ba%e5%9f%9f%e5%8b%95%e6%85%8b%e7%a4%ba%e6%84%8f%e5%9c%96\\_462037.jpg&fid=44161](https://www.mnd.gov.tw/Publish.aspx?u=NewUpload/202304/3_1120411_%e8%87%ba%e6%b5%b7%e5%91%a8%e9%82%8a%e6%b5%b7%e3%80%81%e7%a9%ba%e5%9f%9f%e5%8b%95%e6%85%8b%e7%a4%ba%e6%84%8f%e5%9c%96_462037.jpg&fid=44161)

### 3. 「聯合利剣-2024A」演習（2024年5月）の特徴と意図

2024年5月23、24両日に実施された本軍事演習の口実は、5月20日に実施された頼清徳の総統就任式典での演説である。演習の重点項目としては統合海空戦闘準備パトロール、戦場総合支配権の統合奪取、主要目標の統合精密攻撃打撃備警備、東部戦区部隊の統合作戦能力の検証とされている。

2022年と同様に、本軍事演習でも封鎖と台湾本島直接侵攻の双方を想定した演習域を設定したことが大きな特徴として挙げられるが、両軍事演習で設定した演習海空域は重なっている区域もある（図6）。重複した区域は、主として台湾本島北部と南西部の上陸作戦好適地の沖合に位置している。解放軍がこれらの海域における航空優勢と海上優勢を狙っていることが看取される。

また、今回の演習設定域については金門、馬祖、東引島、烏坵の4離島を取り囲むようにも設定された。東引島、烏坵周辺海域では、海警局公船が演習に参加して、海上法執行訓練を行ったことを明らかにしている。海警局が中央軍事委員会の一元指揮を受けるようになり、武装警察部隊隷下におさまって以降、解放軍海軍との連携が深化したことで、解放軍は海警局を動かしやすくなったと言えるし、今回は戦争状態手前のグレーゾーン事態を演出する狙いもあったのかもしれない。

台湾本島の奪取という大目的からすると、これら離島は事前に奪取しなければならない戦略的要地ではない。とはいえ、2024年2月に金門周辺海域において、中国船舶と台湾海巡署の巡視艇が衝突し、中国人船員4人が海に投げ出され2人が死亡した事故以降、中国海警局は公船による金門島周辺海域でのパトロールを活発化した。そうした状況を固定化させる動きに海警局は出ている。

なお、その意図は不明ながらも2023年2月上旬には台湾本島と馬祖列島を繋ぐ光海底ケーブルが切断される事案が発生して、両島間の通信に重大な支障をきたした件や、金門県、連江県（馬祖）の地方政府・議会、住民に対する「新四通」（架橋と電気・水・ガスの供給）の中国側の働きかけ、2018年から開始された福建省泉州市側のダムから金門島田浦受水池への海底パイプラインを通じた水供給などの動きが見られた点は注目に値する。離島に対しては、軍事的奪取よりも、重要インフラを握りつつ統一戦線による平和的統一を目指す実験的意味合いの方が強いと考えられる。

この他には、台湾本島周辺へのミサイル発射演習や、目立ったサイバー攻撃はなく、軍用機も通常よりやや多い程度にとどまった。空母の動向も確認されていない。東部戦区の演習報道でもミサイル発射シーンは確認されていない（トレーラーの移動シーンは見られた）。政治的には、頼清徳総統を危険な「台湾独立派」であるとの印象付けを狙うとともに、軍事的には統合作戦実行に向けた諸軍兵種、海警間の連携を確認することが今次演習の意図だったように思われる。

### 4. 「聯合利剣-2024B」演習（2024年10月）の特徴と意図

2024年10月14日早朝から同日夕刻までの1日間、解放軍東部戦区が陸軍、海軍、空軍、ロケット軍等の兵力を動員して実施した。演習の口実となったのは、10月10日に台湾で行われた国慶節（双十節式典）における頼清徳総統の演説である。

解放軍東部戦区報道官は、演習の重点科目を艦艇・航空機による台湾本島への接近、諸軍兵種による統合突撃、海空戦備パトロール、重要港湾と重要区域の封鎖統制、海上・陸上への打撃、総合

支配権の奪取であり、戦区部隊の統合作戦実戦能力の検証であると発表した<sup>1</sup>。

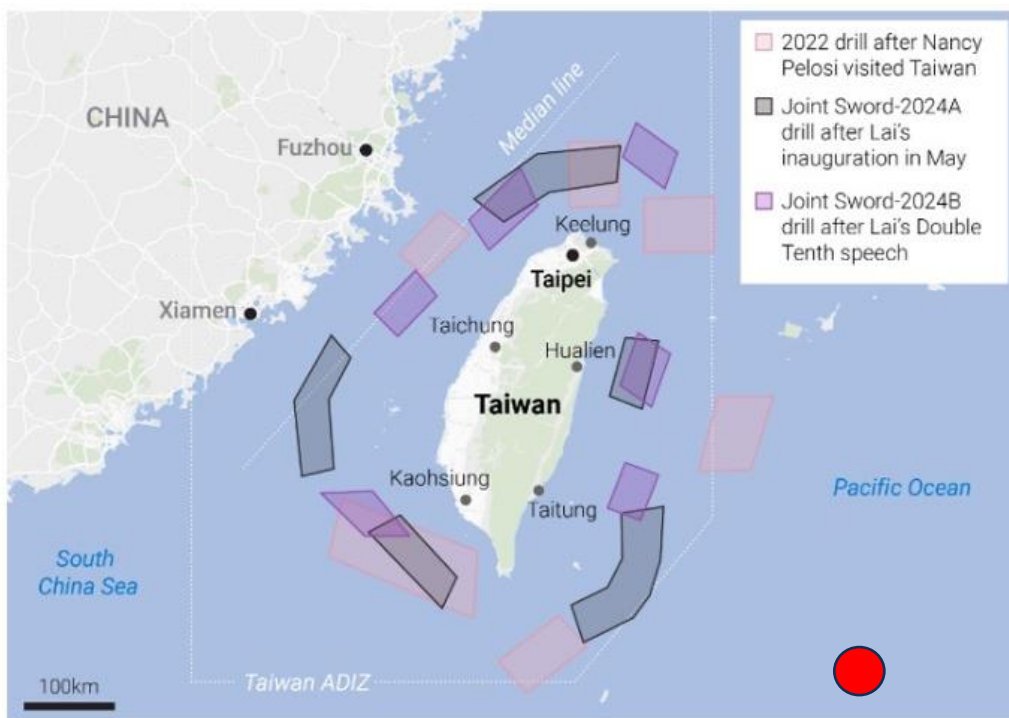
本軍事演習の第一の特徴は、今回の演習海空域が、上述の台湾本島周辺を取り囲んだ過去の諸演習の空隙を埋める形で設定されている点である。台湾海峡上では台中沖、北部では基隆沖、東部では台東沖がそれにあたる。2022年の重要軍事演習、聯合利劍 2024A 及び B でいずれも重複している区域が、上陸好適地と大規模な港湾を擁した台湾本島北部と南西部地域の沖合であるのは変わらない。解放軍がこれらの海空域の支配権保持を重視していることがここでも窺える。

また、今回は空母「遼寧」及びレンハイ級ミサイル駆逐艦が演習に参加していることも明らかにされている。「遼寧」については14日に艦載機（J-15）が発着艦訓練を実施したことも確認されている<sup>2</sup>。解放軍海軍と海警局公船との連携は今回の演習でも見られた。

軍用機については、すべての演習設定空域にスホーイ 30MKK、J-10C、J-16 といった戦闘機や H-6K 爆撃機などのかなりの航空戦力を投入したほか、長射程多連装ロケット部隊が台湾海峡中間線や高雄沖に向けて使用された<sup>3</sup>。

中国側には軍事演習を実施することにより、民進党と頼清徳総統への不安感や不信感を高めようとする意図があったと推測される。

図6 2022年「重要軍事演習」、「聯合利劍-2024A」及び「同B」の軍事演習海空域の比較



Source: CCTV

SCMP

出所：杉浦康之「『聯合利劍 2024B』分析 — 『聯合利劍 2024A』からの変化と連続性を中心に」を基に、空母「遼寧」の発着艦訓練実施海域（赤丸で記載）を筆者が追記。

<sup>1</sup> 東部戦区「東部戦区開展“聯合利劍-2024B”演習」2024年10月14日。

<http://www.mod.gov.cn/gfbw/wzll/dbzq/16345141.html>

<sup>2</sup> 防衛省統合幕僚監部ウェブサイト「中国海軍艦艇の動向について」2024年10月14日。

[chrome-extension://efaidnbnmnibpcjpcglclefindmkaj/https://www.mod.go.jp/js/pdf/2024/p20241014\\_02.pdf](chrome-extension://efaidnbnmnibpcjpcglclefindmkaj/https://www.mod.go.jp/js/pdf/2024/p20241014_02.pdf)

<sup>3</sup> 高志栄「中共『聯合利劍-2024B』演習研究」国防安全研究院、2024年10月15日。

<https://indsr.org.tw/focus?uid=11&pid=2730&typeid=26>



図7 夜間発艦訓練を行う「遼寧」艦載機



出所：中国国防部ウェブサイト（2024年10月14日）

<http://www.mod.gov.cn/gfbw/wzll/dbzq/16345272.html>

## 5. 「空域保留区」の設定と解放軍海軍艦艇、海警公船の台湾周辺での展開

2024年12月10日、台湾国防部は、中国が過去30年近くで最大規模の海軍艦艇を周辺海域に配備しており、台湾に対する脅威はこれまでの軍事演習よりも顕著であるとの認識を示した。こうした中国の動きが台湾側の動きに連動したものと仮定すると、頼清徳総統の台湾と国交を有する太平洋島嶼国3か国（マーシャル諸島、ツバル、パラオ）歴訪（同年11月30日～12月6日）中のハワイとグアムへの立ち寄りに対する反応になると思われる。

台湾国防部の発表によれば、60隻の解放軍海軍艦艇と30隻の海警公船が南西諸島周辺、東シナ海、南シナ海で活動した。また、台湾国防部は9日、中国軍が台湾対岸の福建省や浙江省の東側空域に航空機が許可なく進入するのを禁止する「空域保留区」を11日まで7カ所設定したことを明らかにした<sup>4</sup>。

他方で、解放軍はこれまで見られたような演習実施の宣言やコメントを発していない。中国国防部の呉謙報道官（上級大佐）が、演習実施や時期は必要性や状況に応じて自ら決定すると述べるにとどまっている<sup>5</sup>。

解放軍海軍のコルベット（056A型。満載排水量1500トン）クラス以上の水上戦闘用艦艇は北海艦隊に40隻弱、東海艦隊と南海艦隊に各50隻強が配備されている<sup>6</sup>。合計148隻のうち実戦任務

<sup>4</sup> 「中国、軍艦など過去最大100隻近く展開 事実上の演習開始 台湾側分析」『産経新聞（ウェブ版）』2024年12月10日。

<sup>5</sup> 新聞發言人「国防部回应搞不搞演習：兵無常勢 水無常形」中華人民共和國国防部、2024年12月13日。

<sup>6</sup> 『世界の艦船 2月号増刊 中国海軍発達史』第1012号（2024年）掲載データを参照。



についているのは常識的に考えて約3分の1であるから50隻弱となる。それらを第一列島線内だけで運用したとしても、まだ台湾側が主張する60隻と比べ数が足りない。しかも現代の解放軍海軍の軍事戦略は「近海防御、遠海護衛」であり、第一列島線内で艦艇の運用が完結する訳でもない。また、本当に60隻の海軍艦艇が第一列島線内外で動いているならば、防衛省・自衛隊からも報道発表資料として公表されるはずであるが、台湾側の主張に見合う発表はされていない<sup>7</sup>。海警局公船については、通常尖閣諸島魚釣島周辺海域に4隻、金門島周辺海域やフィリピン周辺の南シナ海に各数隻が常時動いているのは確かだが、そのほかにも特筆すべき状況が生じた旨の報道はない。

また、「空域保留区」近くを飛行する民間機の運行状況について、筆者は1年前のほぼ同日ほぼ同時刻のフライトレーダー24のデータと比較したが、特段の差異を見つけることはできなかった。そのため、民間航空機に対する規制は、今回はなにもなかったと判断した。これらの事実から推測すると、今般の解放軍の動きは統合戦備パトロールの一環という見立てが妥当ではないだろうか。

これまでは、台湾と米国との関係進展や頼清徳総統のアクションに対する反発という口実で解放軍は演習を実施してきた。それを今回しなかった理由について推測すると、やはりトランプ政権成立直前の時期であることが中国側に抑制をもたらした可能性がある。習近平政権はトランプ政権をかなり警戒し、その発足当初から両国が対立する可能性のある軍事演習を実施するのは得策ではないと判断したのではないだろうか。

## おわりに

本稿の分析を通じて、中国が台湾本島を包囲する形式の軍事演習を積極的に実施して、中台関係の漸進的な現状変更を企図していることはほぼ明らかとなった。解放軍が台湾本島に侵攻する実力を持っているかのように台湾や世界に対してアピールしている。

軍事演習の口実（きっかけ）は米台関係の接近や頼清徳総統の言動である。そうすることで、中台関係の一方的な現状変更は台湾側が企図したものであり、解放軍の演習はそのリアクションに過ぎないという姿勢である。

解放軍の軍事演習は統合作戦重視であることは確かであり、徐々に能力を高めていることも事実である。その一方で、解放軍は実際の軍事演習よりも大規模に見せたり、統合作戦成功の可能性が著しく高まっているように見せたりする報道が多々見受けられる。これは中国が宣伝戦の重要性を強く認識していることの表れであろう。

他方で、中国は台湾回収の手法について「平和統一が上策、武力統一は下策」という認識はどの指導者も熟知しているものと考えられる。ただし、平和統一への圧力を高めるために軍事力の近代化と洗練された統合作戦が不可欠との認識に中国と解放軍は達していると考えておいた方がよい。実際に台湾有事になった際、中国の空母部隊が台湾本島東側海域で活動することは、米軍や自衛隊の潜水艦戦力を考えると至難なことだと思われる。また、台湾島を取り囲むような演習域を設定するのは易しいが、海軍艦艇や海警局の公船だけで封鎖が可能かについては疑問が残る。本当に封鎖を達成したいのであれば、港湾への出入港を阻止するために機雷を使用する必要があるだろう。また飛行禁止空域を設定し、そこに進入すれば撃墜する覚悟も必要である。

台湾軍は、非対称戦力（ミサイル、潜水艦、無人機、無人艇等）と正面装備（戦闘機や戦車等）

<sup>7</sup> 『「軍演説」 缺佐證 揭仲：編故事也要會『看圖說故事』『聯合新聞網』2024年12月11日。

のバランスを取りながら健全に武器装備を近代化させていく必要がある。正面装備だけをそろえようとしても、予算規模も人員規模も巨大な解放軍には対抗できないのは明白である。台湾軍の動向については、さしあたり新総統が就任してから 10 か月以内の公表が義務付けられている 2025 年 3 月に公表予定の「四年期国防総検討」(QDR) に注目する必要があるだろう。頼清徳政権が蔡英文政権より踏み込んだ国防方針を公表する可能性がある。

### 【参考文献】

- 飯田将史「台湾を囲む中国による軍事演習 — その特徴、狙いと今後の展望」『NIDS コメンタリー』第 325 号、2024 年 5 月 28 日
- 杉浦康之「情報支援部隊の創設に伴う中国人民解放軍の組織改編」『NIDS コメンタリー』第 328 号、2024 年 6 月 4 日
- 杉浦康之「『聯合利剣 2024B』分析 — 『聯合利剣 2024A』からの変化と連続性を中心に—」*SPF China Observer*, 2024 年 12 月 10 日
- 千綿るり子「中国軍東部戦区の対台湾演習『聯合利剣-2024A』 — 海警船の参加状況を中心に」『JASI リサーチメモ』2024 年 6 月 14 日
- 門間理良「総統就任演説に見る頼氏の対中認識」『正論』2024 年 8 月号

以 上